

に符合するもの尤も多し。佛學、洋學、諸子、百家の流、豈に比倫すべき所ならんや。是れ列皇の之を重んじ、大に之を用ひたまふゆゑなり。其の儒教を言説記載するもの、經史子集の書、甚だ浩博なりといへども、其の要とする所の者は、彼が所謂四書六經是れなり。其の支流、亦經と稱するもの數籍あり。加賀の國人、太田元貞なる者、苦學數十年、能く其の經義を明かにし、九經談を著はす。其の書頗る經說の要領を得たり。其の總論なるもの、又其の要を述ぶ。友人其の書を持ち來りて予に示し、更に予が説を求む。故を以て、予平生胸裏藏する所を述べ、其の長を取り、其の短を議し、遂に此の冊子を作爲し、假に九經談總論評説と名づけ之に贈る。其の論説する所、激切に過ぐるものあるが如しといへども、舊弊を救ひ、頽俗を振はんと欲するもの、或は激切嚴猛ならざるを得ず。夫れ曲木を直うせんと欲するもの、之を直うするに當りては、其の直きを過さざるときは、之

をして直からしむること能はず。又、醫師の病を治むる、劇疾に遇へば、必ず峻劑を用ひざることを得ざるが如し。且つ大徳過化存神の妙にあらざるよりは、其の言語、激切嚴猛ならざるを得ざるものあり。夫の溫良恭儉讓は徳の尤も美なるものといへども、亦概して美德と爲しがたきものあり。是を以て、孔丘の言論の如きも、美は則ち美なりといへども、其の溫恭婉曲なるを以て、後人之を誤解するもの少なからず。故に或は十人十種の説を爲すものあり。心術の不正なる者に至りては、溫恭の言説、中行の形迹を取りて、口實と爲し、以て郷原僞行の資と爲すものも亦少なしとせず。是れ溫良恭儉の弊と謂ふべし。其の義を推すときは、恐らくは人を誤るの責を免れがたきものあらん。激切嚴猛なるものは、少しく己の徳を損するの失ありといへども、其の言論明白判然たるを以て、人を過らしむるの弊あること鮮し。寧ろ己の徳を損するも、人をして過なからし



めんと欲するもの、亦是れ志士仁人の心意ならんか。時に、文久二年壬戌春二月、松代長谷川深美昭道識す。

(一) 文久二年作。

(二) 原文には元亮に作る。

(三) 支那。

(四) 孔子、孔は姓、丘は名、子は敬稱。

(五) 論語里仁篇に出づ。

(六) 欽明天皇。

(七) 錦城と號す。

(八) 久保成。

(九) 孟子盡心上篇に、「君子所過者化、所存者神」とあり。

服部友恵を送るの序 (原漢文)

服部先生は關西の人なり。學は古今を窮めて、而して偏倚なく、才は經濟に存して、而して物情に通じ、又詩文に長じて書を善くし、又能く脱然として世味を忘る。而して好んで四方に遊び、國として至らざる所なく、天下の名山勝水を探り、天下の賢才俊傑を友とす。其の積年の涵養する所、推して知るべきなり。今茲戊午の夏、偶、弊邑に過ぎる。請ひて之を留め、因りて其の經歷する所を問へば、則ち鄙陋の言と雖も、應答すること影響の如し。就きて、學ばんと欲する所を問へば、則ち空々の事と雖も、必ず兩端を叩きて之を竭す。是れ人に與すること忠にして、人の善を爲すを與すの人か。

昭道性愚にして才疎なり。之に加ふるに仕途煩冗にして、胸中常に閑ならず。是を以て其の學ぶ所は甚だ淺隘にして、而して又、意を文辭の閑



に留むるに暇あらず。然りと雖も、深く彼の虚文浮辭の徒と流を同じくするを愧づ。嘗て謂へらく、士の重んずる所は道義に在りて詞章に在らざるなり。學の貴ぶ所は大道を明かにするに在りて博覽に在らざるなりと。然して而して比來自ら至愚の世用に適せざるを悟り、遂に骸骨を乞ひ、而して後、身始めて閑に就くを得たり。身は已に閑に就くと雖も、而して心は猶ほ未だ閑ならず。是れ世榮を慕ひて然るにはあらざるなり。老母存すれば、以て事へざるべからず、嗣子幼なれば、以て教へざるべからず、身は國恩に浴すれば、之に報ゆる所以を思はざるべからざればなり。抑も一事の時に補ふことなしと雖も、豈に片言の後に垂るることなかるべけんや。乃ち胸中の藏する所を筆し、人に就きて正を乞はんと欲す。然も其の識見迂僻にして、世と趣を殊にし、其の文辭拙劣にして、しかして見るに堪へず。是を以て、覽る者は、怒らざれば則ち大に笑ふ。昭道深く

之を憂ふ。幸に先生に見ゆるを得て、就きてこれを質す。先生怒らず、笑はず、諄々として教誨して倦まず。槩括矯揉して、迂僻の見をして世に伸ぶべからしむ。何の賜か之に加へんや。先生又行李を戒めて、將に關東に赴かんとす。故に鄙言を陳じて、以て萬一を謝すと云ふ。安政戊午秋八月上澣、松代藩士、長谷川昭道拜具。

(一) 安政五年作。

(二) 經世濟民。

(三) 安政五年。

(四) 論語子罕篇に、「有鄙夫問於我、空々如也。我叩其兩端而竭焉」とあり。

(五) 論語子路篇に出づ。「與、人忠」。

(六) 孟子公孫丑上篇に出づ。「與、人爲善」。

(七) 原文には元亮とあり。



## 獨柳子傳

獨柳子は何許の人なるかを知らず、亦其の名姓を詳にせず。宅邊に一株柳あり、故に獨柳子と號す。蓋し淵明が五柳に擬すと云ふ。其の人と爲りや、志大にして才疎、榮利に走らずして、獨立自適す。好んで書を読めども、強ひて解するを求めず、得る所あれば、輒ち手の舞ひ足の蹈むを知らざるに至る。平居、琴を愛して、常に座側に在り、然も音律を解せず、興來れば、則ち放歌撫弄して、意を寓するのみ。性の愚なる、一能も其の名を成すこと能はず、然も時に或は長劍を提げて、悲歌蹈舞し、或は經傳を閱して、慨然として永嘆す。獨立群せず、夷齊を慕ひ、和して流れず、則ち柳下惠を學ぶ。又傳説孔明の出處を慕ひ、而して深く杞憂を抱く。故に之を用ふれば、則ち進んで其の愚を盡し、之を舍つれば、則ち退いて其の愚を守り、進退窮達を以て喜愠を爲さざるなり。性、酒を好まず、味を嗜まず、喜んで喫烟

するのみ。喫烟する者は、口鼻綠烟を吐く。故に或は戯れに綠雲仙人と號す。庭に櫻あり、籬に菊あり。櫻は春陽を得て花を發き、其の鮮美なること百花に冠たり。しかして落花の時に至りては、則ち片英を残さず。其の美にして且つ潔なるを愛するなり。菊は深秋に至りて芳を放ち、能く霜露に堪へて群芳に殿す。其の隱逸を愛するなり。家尤も貧にして、仰事俯畜に給せず。故に嘗て小官を求めて恥と爲さず。又、後圃に耕し、専ら賤役を執りて憂と爲さず。尙、給せざれば、則ち人の爲に芬を切る。しかも亦頗る自得して、將に以て身を終へんとするが若し。昔に曰く、子輿氏云ふことあり、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はずと。斯の若き人の流か。無懷氏の民にあらず、葛天氏の民にあらず。或は曰く、日本信陽の狂夫と。然りと雖も、其の所在を知らず。



- (一) 嘉永六年冬作、自敘傳の類なり。
- (二) 何所と同じ。
- (三) 晋の陶淵明、宅の邊に五本の柳あるを以て五柳先生と稱す。
- (四) 伯夷、叔齊。
- (五) 殷代の名臣。
- (六) 諸葛亮、蜀漢の劉備の大臣。
- (七) 仰ぎて父母に事へ俯して妻子をやしなふ。
- (八) たばこ。
- (九) 孟子。

詩鈔

偶作

一身奉君無他念。承順匡救宜隨時。孔曰成仁孟取義。仁義所存氣何飢。  
 心術正大且明白。磨而不磷涅而不緇。生死榮辱付天地。從容安命眞男兒。

一身君に奉じて他念なし。承順匡救は宜しく時に隨ふべし。孔は仁を成すと曰ひ、孟は義を取る。仁義の存する所は氣何ぞ飢えん。心術正大且つ明白。磨して磷せず、涅して緇せず。生死榮辱天地に付す。從容命に安んずるは眞の男兒。

(一) 論語用貨篇に出づ。



又

長松<sup>ハナ</sup>亭々<sup>トシトシ</sup>冬夏<sup>トシトシ</sup>綠<sup>ナリ</sup>。 高聳<sup>タカク</sup>雲霄<sup>クモノカミ</sup>傲<sup>ムカシ</sup>風霜<sup>カゼノシロ</sup>。 藤蘿<sup>フジノ</sup>縷絡<sup>イト</sup>倚<sup>ヨリ</sup>傍樹<sup>ナリ</sup>。 桃李<sup>トシ</sup>爛漫<sup>シラシラ</sup>媚<sup>メ</sup>春陽<sup>ハルノヒ</sup>。

長松は亭々として冬夏緑なり。高く雲霄に聳えて風霜に傲る。藤蘿は縷絡して傍樹に倚る。桃李は爛漫として春陽に媚ぶ。桃李藤蘿君傲ふこと勿れ。須く期すべし、松柏の獨り操を正しくするを。

一室吟

有<sup>リ</sup>客<sup>キヤク</sup>有<sup>リ</sup>客<sup>キヤク</sup>在<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>室<sup>ノ</sup>。 身<sup>ミ</sup>在<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>室<sup>ノ</sup>心<sup>ココロ</sup>在<sup>ニ</sup>國<sup>ノ</sup>。 國<sup>クニ</sup>恩<sup>オン</sup>欲<sup>ス</sup>報<sup>ヘ</sup>區<sup>クニ</sup>區<sup>クニ</sup>忠<sup>チウ</sup>。 忠<sup>チウ</sup>誠<sup>セイ</sup>不<sup>レ</sup>達<sup>セ</sup>壅<sup>オウ</sup>閉<sup>ヘイ</sup>極<sup>キョク</sup>。  
指<sup>シ</sup>鹿<sup>カ</sup>爲<sup>シ</sup>馬<sup>バ</sup>無<sup>ク</sup>人<sup>ニ</sup>辨<sup>ズ</sup>。 孤<sup>コ</sup>臣<sup>チン</sup>心<sup>シン</sup>裏<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>誰<sup>ニ</sup>誰<sup>ニ</sup>識<sup>ス</sup>。 世<sup>セ</sup>上<sup>ノ</sup>悠<sup>ウ</sup>悠<sup>ウ</sup>不<sup>レ</sup>足<sup>ク</sup>論<sup>ズ</sup>。 皇<sup>スミ</sup>天<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>眼<sup>ノ</sup>明<sup>ク</sup>白<sup>ク</sup>。  
客<sup>キヤク</sup>あり、客<sup>キヤク</sup>あり、一室<sup>イツシツ</sup>に在<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>。 身<sup>ミ</sup>は一室<sup>イツシツ</sup>に在<sup>レ</sup>れども心<sup>ココロ</sup>は國<sup>クニ</sup>に在<sup>リ</sup>。 國<sup>クニ</sup>恩<sup>オン</sup>報<sup>ヘ</sup>ぜんと欲<sup>ス</sup>す、區々<sup>クニクニ</sup>の忠<sup>チウ</sup>。 忠<sup>チウ</sup>誠<sup>セイ</sup>達<sup>セ</sup>せず、壅<sup>オウ</sup>閉<sup>ヘイ</sup>極<sup>キョク</sup>まる。 鹿<sup>カ</sup>を指<sup>シ</sup>して馬<sup>バ</sup>と爲<sup>ス</sup>

すも、人の辨ずるなし。 孤臣の心裏誰あつてか識らん。 世上悠悠論ずるに足らず。 皇天上帝眼明白。

(一) 此の場合に於ては、松代藩を指す。  
(二) 秦の趙高の故事。

又

有<sup>リ</sup>客<sup>キヤク</sup>有<sup>リ</sup>客<sup>キヤク</sup>在<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>室<sup>ノ</sup>。 受<sup>ウ</sup>屈<sup>クツ</sup>不<sup>レ</sup>屈<sup>セ</sup>意<sup>イ</sup>氣<sup>キ</sup>安<sup>ク</sup>。 悠<sup>ウ</sup>然<sup>トシ</sup>仰<sup>ウ</sup>天<sup>ノ</sup>獨<sup>ニ</sup>微<sup>ニ</sup>笑<sup>ス</sup>。 傍<sup>ナリ</sup>人<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>解<sup>セ</sup>心<sup>ココロ</sup>自<sup>ラ</sup>閑<sup>ク</sup>。  
世<sup>セ</sup>事<sup>ノ</sup>千<sup>チ</sup>變<sup>ヘン</sup>且<sup>ツ</sup>萬<sup>マン</sup>化<sup>ス</sup>。 禍<sup>ワ</sup>福<sup>フク</sup>榮<sup>エイ</sup>辱<sup>ジュク</sup>是<sup>レ</sup>轉<sup>テ</sup>輪<sup>リン</sup>。 十<sup>ジュウ</sup>萬<sup>マン</sup>甲<sup>ケツ</sup>兵<sup>ヘイ</sup>存<sup>ニ</sup>胸<sup>ノ</sup>裏<sup>ニ</sup>。 獨<sup>ニ</sup>出<sup>シ</sup>獨<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>天<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>寬<sup>ク</sup>。  
客<sup>キヤク</sup>あり、客<sup>キヤク</sup>あり、一室<sup>イツシツ</sup>にあり。 屈<sup>クツ</sup>を受けて屈<sup>セ</sup>せず、意<sup>イ</sup>氣<sup>キ</sup>安<sup>ク</sup>し。 悠然<sup>ウイゼン</sup>として天<sup>テン</sup>を仰<sup>ウ</sup>ぎて獨<sup>ニ</sup>り微<sup>ニ</sup>笑<sup>ス</sup>す。 傍<sup>ナリ</sup>人<sup>ノ</sup>解<sup>セ</sup>せず、心<sup>ココロ</sup>自<sup>ラ</sup>閑<sup>ク</sup>なり。 世<sup>セ</sup>事<sup>ノ</sup>千<sup>チ</sup>變<sup>ヘン</sup>且<sup>ツ</sup>萬<sup>マン</sup>化<sup>ス</sup>。 禍<sup>ワ</sup>福<sup>フク</sup>榮<sup>エイ</sup>辱<sup>ジュク</sup>是<sup>レ</sup>轉<sup>テ</sup>輪<sup>リン</sup>。 十<sup>ジュウ</sup>萬<sup>マン</sup>の甲<sup>ケツ</sup>兵<sup>ヘイ</sup>胸<sup>ノ</sup>裏<sup>ニ</sup>に存<sup>ス</sup>。 獨<sup>ニ</sup>り出<sup>シ</sup>し獨<sup>ニ</sup>り入<sup>レ</sup>れて天地<sup>テンチ</sup>寬<sup>ク</sup>なり。



又

有客有客在一室。閑閱經傳觀古今。獨立不群慕夷齊。和而不流學展禽。  
 堪憐世上輕薄兒。東走西顧一何疾。生涯戚々身心勞。不了英雄閑日月。  
 客あり、客あり、一室に在り。閑に經傳を閑して古今を觀る。獨立して  
 群せず、夷齊を慕ふ。和して流れず、展禽を學ぶ。憐むに堪へたり、世上  
 輕薄の兒。東走西顧一に何ぞ疾しき。生涯戚々として身心勞す。了  
 せず英雄の閑日月。

(一) 柳下惠。

又

有客有客在一室。讀書終日友古人。古人何人是傑出。本居氏鈴屋大人。  
 卓識特達且強力。能明古道辨本末。偏見執拗雖未免。天下因子覺醉夢。

世上悠悠知己少。吾替子說示後人。

客あり、客あり、一室に在り。讀書終日古人を友とす。古人何人か是れ  
 傑出せる。本居氏鈴屋大人。卓識特達且つ強力。能く古道を明かに  
 して本末を辨ず。偏見執拗未だ免れずと雖も、天下子に因りて醉夢を  
 覺ます。世上悠悠知己少し。吾れ子が説を替して後人に示さん。

(一) 本居宜長。

又

有客有客在一室。窓前讀書觀古今。古今讀書醉糟粕。邪說妄言又空談。  
 空談邪說充天下。天下滔滔識者鮮。吾愛安藝山陽子。英才卓識且能文。  
 尊王重內彰斯道。立言著書惠後人。雖儒臭猶未全脫。寔是儒流絕倫人。



客あり、客あり、一室に在り。窓前書を讀みて古今を觀る。古今書を讀みて糟粕に醉ふ。邪説し妄言し又空談す。空談邪説天下に充つ。天下滔々識者鮮し。吾は愛す安藝の山陽子。英才卓識且つ文を能くす。王を尊び内を重んじて斯の道を彰かにす。言を立て書を著して後人に惠む。儒臭猶未だ全く脱せずと雖も、寔に是れ儒流絶倫の人。

(二) 頼山陽。

又

有客有、客在一室。從來欽慕西山君。重内輕外明本末。尊王抑霸正名分。彝倫隱然因君敍。嗚呼寔絶代名士。惜君猶未免儒臭。作事頗有佞儒癖。儒佛元是殊俗教。葬祭何爲用儒禮。當時文明未全開。君生今須別有視。客あり、客あり、一室に在り。從來欽慕西山君。内を重んじ外を輕ん

じて本末を明かにす。王を尊び霸を抑へて名分を正しくす。彝倫隱然君に因りて敍す。嗚呼寔に絶代の名士なり。惜むらくは君猶ほ未だ儒臭を免れず。事を作すに頗る儒に佞するの癖あり。儒佛元是れ殊俗の教。葬祭何ぞ儒禮を用ふるを爲さん。當時文明未だ全く開けず。君今に生れなば、須く別に視ることあるべし。

(一) 徳川光圀。

(三) 實と同じ。

又

有客有、客在一室。閑對書卷消長日。胸裏已語三百載。天下英俊知是誰。熊澤伯繼字了介。聰明雄傑王佐才。嗟君得志雖行時。中道蹉跎不終志。又嗟獻忠言幕下。精誠不察鋼幽地。吾悲君意慕君賢。所願從君終餘年。



客あり、客あり、一室に在り。閑に書卷に對して長日を消す。胸裏已に  
 諳んず三百載。天下の英俊知んぬ是れ誰ぞ。熊澤伯繼字は了介。聰  
 明雄傑王佐の才。嗟く、君志を得て時に行はると雖も、中道蹉跎して志  
 を終へざりしを。又嗟く、忠言を幕下に獻ぜしも、精誠察せられずして  
 幽地に錮せられしを。吾れ君が意を悲しみて、君が賢を慕ふ。願ふ所  
 は君に従ひて餘年を終へん。

(一) 熊澤蕃山。

(二) 蕃山、下總の古河に幽せらる。

又

有客有客在一室。師日地而友鬼神。戒愼恐懼又愼獨。心性正大氣浩然。  
 不恥鬼神與日地。人間快樂何加焉。

客あり、客あり、一室に在り。日地を師として、鬼神を友とす。戒愼し、恐  
 懼し、又獨を愼む。心性は正大にして氣は浩然たり。鬼神と日地とに  
 恥ぢず。人間の快樂何ぞ焉に加へん。

(一) 孟子公孫丑上篇に「浩然の氣」といふことあり。

又

有客有客在一室。終日端坐且默然。默中所觀是何物。日地萬物備我身。  
 六經畢竟我注脚。注脚萬卷總糟粕。悠悠世上讀書生。終身汲汲舐糟粕。  
 客あり、客あり、一室に在り。終日端坐して且つ默然たり。默中に觀る  
 所は是れ何物ぞ。日地萬物我が身に備はる。六經畢竟我が注脚。注  
 脚萬卷總て糟粕。悠悠たる世上の讀書生。終身汲々として糟粕を舐  
 む。



(二) 宋の陸象山が唱へたる語。

古 詩

其一

上世神業事。其詳雖難究。正有三器存。隱然寓至道。天地合其德。日月同其明。可以臨四海。可以保萬生。列神恭奉戴。天位斯尊榮。神意雖難測。大德真可徵。

上世神業の事、其の詳は究め難しと雖も、正に三器の存する有り、隱然として至道を寓す。天地と其の徳を合し、日月と其の明を同じくす。以て四海に臨むべく、以て萬生を保んずべし。列神恭しく奉戴し、天位斯に尊榮なり。神意測り難しと雖も、大徳真に徵すべし。

其二

日神發光輝。赫々照六合。列聖奉大訓。上行而下習。至教不言行。彝倫敍無爲。天地位于斯。萬物育于茲。巍々兮蕩々。無民能名焉。神胤綿々榮。大道昭昭存。

日神光輝を發し、赫々として六合を照す。列聖大訓を奉じ、上行ひて下習ふ。至教は不言に行はれ、彝倫は無爲に敍す。天地斯に位し、萬物茲に育す。巍々として蕩々たり。民能く名づくるなし。神胤綿々として榮え、大道昭々として存す。

其三

神皇繼于天。于斯立人極。眞文兼眞武。皇道平且直。不言仁仁存。不



語義義明。億兆以愷樂。遐邇以肅清。皇綱賴以存。寶祚無有窮。茫茫  
天地間。國體獨峻秀。

神皇天に繼ぎ、斯に人極を立つ。眞文眞武を兼ね、皇道平にして且つ直  
し。仁を言はずして仁存し、義を語らずして義明かなり。億兆以て愷  
樂し、遐邇以て肅清なり。皇綱頼りて以て存し、寶祚窮あるなし。茫々  
たる天地の間、國體獨り峻秀なり。

其九

大義奉皇命。一身挫萬軍。精忠貫日月。雄略震乾坤。廟謨遂不良。逐  
狼更進虎。赤誠雖不達。遺訓愈惓苦。三世護天室。忠孝無瑕玷。嗚呼  
我楠氏。萬世臣子鑑。

大義皇命を奉じ、一身萬軍を挫く。精忠日月を貫き、雄略乾坤を震ふ。  
廟謨遂に良からず、狼を逐ひて更に虎を進む。赤誠達せずと雖も、遺訓  
愈々惓苦。三世天室を護り、忠孝瑕玷なし。嗚呼我が楠氏、萬世臣子の鑑。

改名古詩

學文講武昭大道。居仁由義養眞才。進則有事業。及衆退則有立言。後垂  
志士從來何徒死。進退窮達共有爲。

文を學び武を講じて大道を昭かにす。仁に居り義に由りて眞才を養  
ふ。進んでは則ち事業の衆に及ぼすあり。退いては則ち立言の後に  
垂るるあり。志士從來何ぞ徒に死せん。進退窮達共に爲すあり。

(二) 孟子離婁上篇にあり。



偶成

曾參、儒流文弱、徒。尙能欲往萬軍中。躬是從來干城士。一身欲當五洲戎。  
 曾參は儒流文弱の徒。尙能く往かんと欲す、萬軍の中。躬は是れ從來  
 干城の士。一身當らんと欲す、五洲の戎。

(二) 孔子の弟子。

同

大道晦湮百千年。神皇至教漸失傳。儒佛誤用敗皇極。洋籍妄讀亂天真。  
 天下滔々鮮識者。狂夫號泣訴日神。  
 大道晦湮すること百千年。神皇の至教漸く傳を失ふ。儒佛誤り用ひ  
 て皇極を敗り、洋籍妄に讀んで天真を亂す。天下滔々として識者鮮し。

狂夫號泣して日神に訴ふ。

同

一往壯士氣。浩然溢大塊。此氣無所伸。寄我神劍利。排山戮虎豺。跨  
 海斬鯨鯢。  
 一往壯士の氣、浩然として大塊に溢る。此の氣伸ぶる所なし。我に寄  
 せよ、神劍の利なるを。山を排いて虎豺を戮し、海に跨つて鯨鯢を斬ら  
 ん。

同

文如韓柳疎實用。詩如李杜閑語言。獨求大道雖未得。朝修夕講對乾坤。



文は韓柳の如きも實用に疎し。詩は李杜の如きも閑語言。獨り大道を求めて未だ得ずと雖も、朝に修め夕に講じて乾坤に對す。

(一) 韓愈、柳宗元。

(二) 李白、杜甫。

和 歌

あかねさし豊榮のほる日の本のやまとだましひみがけますらを

たわやめのをみななりともたわまざる男心おこせ大和國人

つたなきも誠の道にかなひなばそは天地の神も守らん

鶴

天雲を羽風にわけて飛ぶ田鶴は稻穂にさわぐむれに入らめや



子どもらがしをりに

異邦のことならふともわするなよ本つ御國の本のこころを

同

皇神の直き道ゆけとつ國のまがれる道にまよふなよゆめ

風

ひとかたに心さだめて吹けよ風なびかぬ草はあらじとぞ思ふ

松

雪霜のかかりて後ぞ知らるべきかはらぬ色の松のみどりは

○

大君のみ代はとこしへ天てらす日の大神のまさんかぎりは

日の神は天地の本世の中の萬の物の大御祖なり

○

天の原ふりさけ見ればかしこしやひとり尊し日の大御神

○

大和心を

天地の誠のみたま集りてやまと心となりにつけらしも

○

あしはらのみづほの色もわかぬまでしげるしこ草はらへ御民ら

○

やきがまのとがまもがもなあしはらにしげるしこ草打ちはらはなん



○ 梓弓やたけ心をふりおこし引きかへさなんすめろぎの道

題皇道述義歌

久方の天の磐屋戸開きにし神の功ししたはるるかも

同

かしくくも天のいはやどあけまし、神の心にならふこのふみ

同

いやなくも日の大神の御手とりて出しまつりし神わざぞこれ

須磨琴をしらべんとてわがしたへる古りにし人を今様  
にならひうたひつれどいとつたなくて心うし

古きみ代より すめらぎの 大みかども たぐひなき いともかし  
 こき おみこそは ふぢはらのあそみ かまたりのきみ  
 古きみ代より すめ國の たからとあふぐ いとたかき やまとだま  
 しひ 得し人は あしのねわけの 清まるのうし  
 古きみ代より もののふは さはにあれども もののふの かがみと  
 なれる もののふは 河内のくにの 楠のうし  
 ふりにし世より もろこしの からの國には ますらをの のりとあ  
 ふが 人はたそ ふがんのふえつ 諸かつりやう  
 ふりにし代より もろこしの からの國にも ひのもとの 大和心に  
 かなひしは 弧竹の國の ふた男の子



- 二 傅巖の傳説、諸葛亮。
- 三 伯夷、叔齊。

# 建言

## 皇學意見

學校御取建被爲在度儀と奉存、乍恐謹考之趣、其一端を奉申上候處、御目通被仰付、御尋之上、尙其の次第認取申上候様、御内命被成下、難有仕合に奉存候。依之重々乍恐謹んで大要左に奉申上候。

一、學問の道は、博く之を學び、審に之を問ひ、愼んで之を思ひ、明かに之を辨へ、篤く之を行ひ候儀、學問の準則に御座候て、學問の全體と奉存候。其の之を學び、其の之を行ひ候所のものは、即ち人の人たる道は、即ち君臣、夫婦、父子、兄弟、長幼、朋友の六達道に御座候て、其の之を行ひ候所以のものは、仁勇義



智禮信の六達徳に御座候。其の達道を経綸し、其の達徳を統貫する者は、一誠に御座候て、即ち三才の大經大法に御座候。三才は日地人を申候儀にて、之を三才の本體に質し候時は、天地人を以て三才と唱へ候儀は、至當の事に無御座候。達道達徳も六品に御座候て、之を三才の大經、神皇の御大道に徴し候時は、五倫五常と申し候は、是れ亦至當の事に無御座候。其の次序も、世の唱へ候所、適當の説に無御座と奉存候。委細の儀は、事長く罷成候儀に付、一旦斯に難申上盡奉存候。右申上候次第に御座候て、學問の道は、三才の大經大法を學び、三才の大經大法を行ひ候に御座候。是れ即ち學問の本體にして、學問の極則に御座候儀と奉存候。

一、學問の本體極則は右の次第に御座候處、天下の儒學者流、徒に堯舜孔孟の徒を以て、學問の淵源、道の底極と仕候故に、其の學と仕り、其の道と仕

り候所、大に三才の大經大法に悖反する者あることを辨知不仕候のみに無御座、其の尊信仕候所の四書五籍の書さへ、其の眞意を識得仕候者甚だ鮮く、殊に中庸の書は、孔丘の孫孔伋の述作仕候て、道徳の大本蘊奥を發揮仕候、大に緊要の書に御座候て、別して其の中、仲尼、堯舜を祖述し、文武を憲章し、上、天時に律り、下、水土に襲ると申候一説に至り候ては、孔伋其の祖父終身の徳業を申述べ、之を千載の後に傳へ候儀にて、儒學者流の深く玩味研究可仕所の事に御座候處、皇國中、儒者と唱へ候者、能く其の心意を識得仕候者尤も鮮き儀と奉存候。孔丘は漢土に生れ候て、周代の人に御座候故に、堯舜を祖述し、文武を憲章し、漢土古今の天時に律り、漢土東西の水土に襲り候儀、實に徳業の至極に御座候て、孔丘の大聖たる所以に御座候。苟も皇國に生れ候者、能く其の心意を識得仕候時は、宜しく大に神皇の御大道を祖述し、神皇の御大法を憲章し、皇國古



今の天時に律り、皇國水上の宜しきに襲り候を以て、學問徳業の要道先務と可仕儀に可有御座候處、天下の儒輩、其の義に達し候者至つて鮮く、徒に儒籍の糟粕に醉溺し、虚文に眩惑し、其の身、皇國の人にして、漢土人の如く、漢土の堯舜を祖述し、漢土の文武を憲章し、漢土の孔孟に阿事偏黨し、漢籍を讀み候を以て業とし、漢事を講習するを以て其の勤とし、我が天時を祭せず、我が水土を辨ぜず、猥に漢土の天時水土を律襲する者に效はんとし、之を以て學問と唱へ、學者と稱し、自ら尊大にし、恣に公卿に驕り、大夫士を慢り、遂に漢土を華とし、皇國を鄙とし、漫に堯舜を稱揚して、神皇を蔑視し、孔孟を尊崇して、君父を輕侮し、空く漢籍を陋讀して、皇典を講修することを知らず、徒に儒教に信從して、皇道を尊奉せず、其の非義悖徳、妄昧昏愚、西夷の奴隸となりて、自ら儒者と唱へ、人よりも儒者と呼ばれ、其の非名に恥づることを知らず、儒は漢土の教名道名なり。

皇國の人にして、漢土の道教の名目を以て其の身に蒙らしむるは、即ち漢土の制を受くるなり。専ら漢土の道教を奉ずるなり。猶、僧侶の自ら佛氏佛者と唱ふるに異ならず。皇國の人にして、佛氏佛者と唱ふるの非なることは、儒者も能く之を知り候ことに候へども、自ら儒者と唱ふることは、佛氏と唱へ、佛者と唱へ候と同じく、其の甚だ非なることを知らずとは、妄昧の至と奉存候。大に人の人たる道を失ひ、神皇の罪人たるのみに非ず、更に堯舜孔孟の罪人となりて自ら知らざる者、滔々皆是れなる事と奉存候。是を堯舜孔孟の道を學び候者とは申し難く、もし堯舜孔孟をして之を聞かしめ候はば、之を何とか申し候べき。孔孟をして皇國に生れしめ候はば、右儒輩の如く、我が神皇を措きて、異邦の堯舜を祖述仕るべきや、異邦の文武を憲章仕るべきや、我が天時水土を舍きて、異邦の天時水土に律襲仕るべきや、我が神皇を蔑視し、異邦の堯



舜文武を尊崇し、我が皇國を鄙として、異邦を華と任り申すべきや、思はざるの甚しきことと奉存候。是れ國學者流の大に儒學を忿疾排斥する所以に御座候。彼の堯舜孔丘は、實に漢土中の大聖人のみならず、大に世界數千載の間に卓越仕候人々に御座候間、其の言論行事も亦大に三才の大經大法に眞合し、能く皇道の羽翼となり、能く皇法の輔弼と相成候儀頗る多き儀に御座候。是れ乍恐八幡大神の取りて之を用ひたまへる所以に御座候。然れども堯舜孔丘猶未だ三才の大經大法を全識すること能はず、是を以て其の言論行事も亦大に三才の大經大法に悖反し、禽獸の道を攙雜し、大に君臣の大道を亂り、父子の正道を敗り、人道を傷害いたし候者少なからず候儀に付、其の善不善を擇ばれずして、猥に之を取りて皇國に用ひさせられ候ときは、大に皇道を敗り、皇法を亂し、大に皇國の御深患と相成候儀に御座候。是の故に固く其の善を

擇びて之を用ひられ、其の不善に至り候ては、嚴に之を排斥拒絶せられ、たき御事と奉存候。是れ乍恐八幡大神の和氣清鷹に神勅あらせられ候所以に御座候。重々乍恐儒教を取りて之を用ひたまはんには必ず厚く八幡大神の神意を奉體せさせられ、其の御取捨御進斥の際、御謹嚴御精密に有之度御事かと奉存候。

一、國學者流、大に皇道を祖述し、皇法を憲章し、皇國を尊奉し、皇神を尊戴し、皇國の忠臣たらんと志願仕候、其の志誠に感稱仕るべき儀に御座候へども、元より皇道の本體を明かにせず、皇法の實體を詳かにせず、三才の大經大法に達せず、只に皇道的一端を取り、一偏に執拗し、猥に堯舜孔孟を忿疾排斥仕候儀に付、儒教の大に皇道に符合仕り、皇法に輔益あることを辨知仕らず、且つ古典の眞義に通せず、又應神天皇の取りて之を用ひたまへる所以の神意に戻り、皇道皇法の儒教と全く同じきもの迄を



疾惡仕り、併せて之を排斥せんと仕候儀に付、何様に心力を盡し候ても、之を排斥仕り得ず、却て自ら徑路に依り、細道を歩み、求めて皇道皇法を狭小に仕り、尙、儒教に勝たんことを欲し候て、陰に老佛（釋）を附會率合仕候故に、上世神皇の御德業等、奇々怪々、荒唐不經、謂ふべからざるの妄説を發し、尙往々虚誕怪異の妄言を發し、大に神皇の御大道を敗り、御大法を亂し、却て神皇の罪人たることを辨知せざるに至り候儀は、誠に洪歎の至に堪へず奉存候。左候へども、本居宣長等の如き、大に心力を古典に盡し、古典をして今日に拜讀すべからしめ、且つ大に儒弊を説破排斥し、天下千載の醉夢を覺し、天下の人をして、大に皇國を尊び、皇神を敬ひ、朝廷を尊戴することを知らしめ候に至りては、皇國の御爲、其の功勞實に大なることに御座候て、實に天地の限、磨滅すべからざるの功績と奉存候。元より陋儒妄儒輩の企て及ぶべき儀には無御座と奉存候。

一、西洋の學、大に天文を明かにし、地理を詳かにし、萬物の形體に精通し、兵術、醫業、器械、航海等に熟達し、又能く富強を致し候に至り候ては、能く其の善を擇んで之を用ひたまへるときは、大に皇道皇法の御裨益となり、皇國の御光輝を振張せらるるに足り候儀に御座候處、三才の大經大法に至り候ては、茫乎として之を辨識仕らず候儀に付、其の不善なる所に至り候ては、大に三才の大經大法に悖戾致し候事に之あり。然る所以のものは、即ち其の人々未だ三才の本體を眞知仕らず、萬物萬道の大本を眞識仕らず候よりの弊害と奉存候。漢上人能く三才の道義を談じ候へども、未だ三才の形體を詳かに仕らず候儀に付、其の道義に於ても、亦未だ甚だ盡さざる所之あり、西洋の人能く三才の形體を語り候へども、未だ三才の道義を明かに仕らず候に付、其の形體も亦未だ甚だ盡さざる所有之候儀に御座候。素より道義の外に形體無之、形體の外に道



義無之、道義と形體と全く同一致の者に御座候間、其の形體に詳かに、其の道義に明かにして、始めて三才の本體、三才の大經、天地萬物萬道萬事の大體、大始全體を全識眞知仕るべき儀に御座候。掛けまくも恐れ多き御事に御座候へども、上世の神皇、大に三才の形體を詳かにせさせられ、大に三才の道義を明かにせさせられ、大に天地萬物萬道萬事の太元、太始全體を全識眞知せさせられ候故に、天日を以て天地萬物萬道萬事の太元、太始と定めさせられ、御身を以て日子と稱へさせられ、大統を天つ日嗣と稱へさせられ、皇太子を日嗣の御子と稱へさせられ、皇后皇女を日女と稱へさせられ、人を日止と唱へさせられ、(日止は日精の此の身に止まるの義に御座候)人の心を日凝と唱へさせられ、心は日精の人身中に凝り止まるの義と奉存候。人の道を誠と唱へさせられ、誠は眞日止にて、天日の眞直なる精氣の斯に止まるの義に御座あるべく、

比と保と通ひ、保と古と通ひ候ことは例の有之ことに御座候。且つ天日は至誠の本體にて、天日の精氣發動流行する者は、即ち至誠の道に御座候。至誠は神靈なる者に御座候間、之に神名を命ぜられ、直毘の神、大直毘の神と稱へさせられ、直毘は即ち誠にて、天日の眞直なる純粹の精氣を指して名づけられ候御事と奉存候。禍つ日の神は曲りたる日の神と申す儀にて、天日の末氣斜横顛反に相成候粗濁の雜氣を指して名づけさせられ候儀にて、決して國學者流の談説仕候、佛如來の如く、天魔の如き者にては無御座儀と奉存候。又乍恐神皇、三才の道義を天下萬世に示したまへる所以の者は、比登、不多、美、與、伊都、武、那々、耶、許々、斗の數名にて、其の義甚だ詳明なる御事と奉存候。比登は日止にて、天日大虛に止まるの義にて、數の太元太始に御座候。不多は含處にて、天日の精氣を含むところの大地の義にて、天日に次ぎ候儀と奉存候。含處を不



多と唱へ候ことは、比登不登と唱へ候ては、普便宜しからず候に付、不多と轉じ候儀と奉存候。美は身にて、神皇の御身を指して宣へる御事に、即ち人の事に御座候と奉存候。此に於て三才具はり候儀に御座候。古來比登不多を只に比不と唱へ候儀も御座候處、孰れにても、大義に多くの害は無之候へども、比登不多と唱へ候方眞傳にて、其の義も勝り候やと奉存候。次に、與は世にて、三才具はり、始めて世界の相立ち候儀に御座あるべく、伊都は出にて、三才具はり、世界立ち、萬物の地中より生れ出づるの義と奉存候。武は群にて、生れ出でたる萬物、地上に群在するの義に御座あるべく、那々は無にて、人物の形體、時有りて消滅仕候義と奉存候。耶は物の上へ立ち昇り候義にて、人物の形體消滅して、其の魂氣天に向つて昇るの義に御座あるべく、許々は、日日にて、其の立昇り候魂氣、天日に復歸するの義にて、日々と重なり候儀と奉存候。斗は止に

て、其の復歸仕候魂氣、天日の中に入り止まるの義に御座あるべく、右數名は實に太古より、乍恐皇統と共に、今日に傳はり候至神至靈の神語に御座候て、尙乍恐、三種の神器と輕重を爲すべからざるの御太寶と奉存候。然るに千百載の間、大に之を尊奉し、大に之を解説仕候者の無之は、不審の至と奉存候。乍恐私義深く、謹考仕候所御座候て、始めて聊か其の義を謹述仕候儀に御座候の處、重々乍恐、右神語の御大義は、天日生り出でて太虚に止まるに始まり、其の天日の神氣發動流行し、大地之を含んで、人、其の間に生れ、三才具はりて、世界始めて立ち、然る後、萬物生立して、地上に蕃息群集し、次に人物の形體死亡消滅して、其の魂氣天に向つて昇り、天日に復歸して、天日の中に止まるに終り候儀、是れ天日至誠一貫の大經大法を示したまへる所以に御座候て、其の次序分毫も移動仕り難く、且つ日精の發動するもの、復歸するもの、降昇往來、生生不息の意、



及び其の物體あれば、必ず其の物則あり、其の淵源あれば、必ず其の流派あるの義、悉く右十言の中に具備含蓄して、一も御遺漏無御座、故に善く三才の象數を盡させられ、造化の妙用を究めさせられ、萬物の始終を詳かにせさせられ、萬物の源流を明かにせさせられ、體用本末、幽明内外、盡させられざる所無之、至らせられざる所無之、實に三才を總括し、萬物を包羅し、萬道を綱紀せさせられ候、至眞至實至神至靈の神言にして、大に三才の大經大法を發揮せさせられ候御事に御座候て、即ち皇道の御本體、皇法の御大本に御座候て、宇内萬世一定不易の大經大訓に御座候儀と奉存候。尙其の意義の詳なることは、別に草稿仕置候者も御座候へども、一旦斯に難相盡奉存候。

一、神皇の天日を以て萬物萬道の太元太始と定めさせられ候所以の者は、申上候も恐れ多き御事に御座候へども、眞に三才の本體、三才の大道に

精通明達したまへる故の御事と奉存候。是の故に、若し此の天日無之ときは、世界は只々暗黒冷寒にして、一物も生育することは不相成儀に御座候。只今にても、南北兩極の直下、日光の遠せざる地方は、天地は有之候へども、終歲氷雪の山を成し、品物生育仕らず候儀にて御座候へば、是にて天地の萬物を生育するに無之、實に日地の萬物を生育する所以の證徴、尤も明白彰著なる儀と奉存候。四時の寒暖、品物の造化、悉く天日の能用に非ざるは無之義に御座候。其の寒暖を爲すこと能はず、品物を生育すること能はざる所の天は、亦如何てか其の萬道萬理を發出するを得申すべきや。是を以て道の本源天より出づると申候ものは、漢土人の謬妄たること亦分明なることと奉存候。神皇の御大道は、眞に至誠にして、至實に御座候間、天日以前を説きたまはず。天日以前は實に人智の及ぶべき所に無之、人目の至る所に無之、人智人目の及ばざ



る所の空無虚理を説き候は、全く妄言虚談に御座候。是を以て、老佛の徒、虚誕怪妄至らざるなきに終り候義と奉存候。是の故に、漢土聖人と唱へ候者は、其の知識頗る明達なる者に御座候間、決して六合の外を語らず、天地以前を談ぜざる儀に御座候。易の書等、天地以前を談説致し候様に相傳へ候儀は、全く後人の附會牽合に御座候て、甚しき妄論曲説と奉存候。其の實、一言も天地以前に及び候ことは無之儀に御座候。然れども、聖人の學一變して老莊の虚無となり、再變して宋儒の空理と相成候ことは、聖人と雖も其の知識未だ明かならざる所有之候て、未だ三才の本體を詳かにせず、三才の大道を眞識せず、天日の萬物萬道の太元太始たることを知らず、只に空天を以て大本太始と心得候よりの過に生じ候弊害と奉存候。然るに、國學者の徒、皇國に生れ、皇道に浴し、皇典に心を盡し候へども、猶未だ皇統の太元を明かにせず、皇道の本體を

詳かにせず、皇典の眞義に達せず、猥に天地以前を談説し、大に神皇の御大道に反し、大に三才の大經に戻り、怪談妄説至らざる所無之所以のもの、老佛の餘唾を剽竊し、之を皇道に附會するの過より發し候儀と奉存候。西洋の學、又天地以前を談説し、誕妄不經、非義無道の言論を發し、己を欺き人を欺き、大に人道を敗亂し、大に三才の罪人たる所以の者、佛老より甚しきに至り候事は、是れ亦大に三才の本體、三才の大經を辨識せざるの致す所に御座候。是の故に、善く三才の本體を明かにし、三才の大經を詳かに仕候義、學問の先務、人道の至要と奉存候儀に御座候。

一、神皇數の初を日止と宣たまひ候にて、天日太虚に止まり、一天の眞中に正座し、動搖したまはぬことを證すべく、古典の大地浮漂の語を以て、大地の天中を旋轉することを徵すべく、古事記の、天地の初發の時、高天の原に生りませる神の御名は、天の御中主の神と御座候、其の御名義、天は



元より天の義にて、御は眞と同じき義にて、即ち一天の眞中に君主となりてましませる御神と申す義にて、是れ天日の御事に御座候。右日止まるの義と、天の眞中主の神と申し奉る御名にて相證し、又之を今日の天體に徴するときは、天の眞中主の御神は天日の御事にて、數の初の比登は日止まるの義なること尤も分明なる義かと奉存候。右天日の一天の眞中に正坐したまひて、萬古少しも動きたまはぬ所、即ち天日の本體にして、一天の大君たる所以の實體と奉存候。是れ萬物萬道の淵源、二誠の根柢にして、乍恐、國常立尊には、未だ國稚くして、人物一切これなき初、實に天日を以て御父とせさせられ、大地を以て御母とせさせられ、葦芽の萌え出づる如く、地中より生れ出でたまへる御事にて、元より人の胎内より生れ出でたまへる御事には、あらせられず候間、眞に天日の御實子にあらせられ候御事、一點疑を容れ奉るべき所無御座、是の故に

初の御名を宇麻志葦芽日子舅の神と稱へさせられ候御事と奉存候。此の御名の義は、宇麻志は美稱にて、葦芽は即ち葦の若芽の義、日子は天日の御子と申し奉る義、舅は父、祖父と同じき義にて、男子の尊稱に有之候て、即ち、うまく、美はしく、葦の若芽の萌え出づる如く、地中より生れ出でたまへる、尊き男神と申し奉る御事と奉存上候。次に宇比地邇の神には、國常立尊の御子にて、天日の御直子には、あらせられず候へども、天日御正統の日子日孫にあらせられ、皇統綿々彌繼々に天津日嗣知しめし候御事にて、當今、天皇にも眞に天日御正統の御子神孫にあらせられ候御事にて、眞に世界の極尊にあらせられ候御事に御座候て、素より異邦萬國の君主企て望むべき儀にては、無御座候。是れ皇國は萬國の宗國にて、皇道は萬道の絶頂、天皇には、宇内の皇大君にまします所以の御實體に御座候儀と奉存候。其の義の詳かなることは、別に草稿仕



候儀にて、是れ亦斯に難相盡奉存候。

一、儒教は天を以て大本とし、老莊は天地以前の虚無を以て大本とし、宋儒も亦天地以前の虚理を以て大本とし、佛氏は天地以前の空無を以て本来とし、西洋諸國も亦天地以前の吾人知ること能はざる者を以て大本と致し候儀にて、各其の本源を異に仕候故に、之を互に異端とも名附け候儀、然る處、前段往々謹述仕候次第に御座候間、我が天地間の萬物萬道は、上世神皇の定め置かせられ候通、此の天日を以て大本太始と仕候事、元より適實至當のことに御座候て、一點の疑を容るべき所無之儀と奉存候。右儒教以下諸教諸學、悉く其の大本を失誤仕り、三才の本體を眞知仕らず、三才の大經を眞識仕らず候故に、其の末流に至り候ては、大に三才の大經大法に悖戻仕候儀、是れ亦必然の理勢と奉存候。苟も皇國に生れ、皇恩に浴し、人體を具足仕候者にして、如何てか世界第一の皇道

に反し、世界第一の皇恩に戻り、世界第一の神皇を蔑視し、三才の大經大法に悖戻仕候者可有御座哉。然るに、大に三才の大經大法に悖戻致し候異邦の教學を尊戴敬奉し、辭溺浸淫し、更に神皇を蔑如し、皇道皇法を度外に置き、或は非議輕侮するに至り候は、其の人至愚の教訓すべからざる者にては決して無之候へども、其の習の性となり、風俗其の心を移し、皇道皇法の世界第一の至道たることを知らず、乍恐神皇の世界第一の極尊至神にましますことを辨へずして、三才の大經大法を眞識せざるの過と奉存候。是の故に、天下の人をして、大に明かに能く之を論し、大に詳かに能く之を導き、三才の本體、三才の大經、萬物萬道の大本太始を眞識せしめ候ときは、必ずや異端邪說に眩惑せられず、神皇の大道、神皇の大法、皇學の全體を辨識仕候事、元より難きにあらざるべきことと奉存候。道は大路の如く、天日の天に中するが如く、正大公明彰著なる



者に御座候て、玄妙曖昧なる者にては無御座候間、決して知り難き者にては無之候。只憂ふる所は、道を説き候者道を知らざる故に、其の道知り難く見え難きことにて御座候。是れ古今の通患にて御座候。能く三才の大經大法を辨識仕候ときは、何國の教を學び、何流の學を講じ候とも、本心の皇國魂磨して磷せず、涅して緇せず、決して異端邪説に惑ひ候こと無之、必ず其の大本、議論一定仕るべき儀と奉存候。苟も其の大本已に一定仕候ときは、其の枝葉萬般の議論も、亦随つて一定仕候事は、是れ亦必然の理勢に御座候儀と奉存候。獨り皇國人のみに無之、世界萬國の人に御座候とも、悉く日地の覆育を蒙り、人體人心を具足仕候者に御座候て、殊に其の間、英達明敏、宇内に卓越致し候者も少なからず候儀に付、是れ亦決して訓導相成り難きことには必ず有之まじくと奉存候。

一、神皇の御大道は一誠に御座候て、一誠は天日の大徳にして、天日の本體に御座候。其の一誠の神氣發動流行するもの、即ち天日の大道に御座候て、萬物萬道の大本に御座候。是の故に、大地之を得て以て其の徳性とす、其の神氣發動流行するもの、即ち大地の道に御座候。人亦之を得て、以て其の徳性とす、其の神氣發動流行するもの、即ち人の道に御座候。是れ所謂三才の大經大法に御座候て、其の未だ發動せざるに當り候ては、偏ならず倚ならず、至靜にして至善、其の中に御座候故に、一物の加ふべきなく、一事の言ふべきなく、眞實無妄にして、至誠に御座候。是れ其の本體にして、所謂天下の大本に御座候て、人の本性に御座候。其の發動流行して、皆其の節に中り、乖戾する所無之は、是れ其の大用にして、所謂天下の達道に御座候て、即ち性に率ふの道に御座候。人の萬道萬事皆此の一誠の發動流行する者にして、外より來り、外より求むる者に無



之、是の故に、君善く一誠を行ふときは仁君となり、臣善く一誠を行ふときは忠臣となり、夫善く一誠を行ふときは和天となり、婦善く一誠を行ふときは貞婦となり、父善く一誠を行ふときは慈父となり、子善く一誠を行ふときは孝子となり、兄弟長幼朋友の間、各善く其の一誠を行ふときは、愛敬惠悌信となり候儀にて、其の觸るる所に随つて、其の名義各異なる儀に御座候へども、其の實は一誠にて御座候。又其の惻隱すべき者來りて之に觸れ候ときは仁心發し、進取すべき者來りて之に觸れ候ときは勇心發し、羞惡すべきもの來りて之に觸れ候ときは義心發し、是非すべきもの來りて之に觸れ候ときは智心發し、辭讓すべきもの來りて之に觸れ候ときは禮心發し、信ずべきもの來りて之に觸れ候ときは信心發し候儀にて、其の發する所に就きて、其の名義を異に致し候へども、其の本は亦悉く一誠の發動流行するものにして、固より二端無之儀

にて御座候。喜怒惡憂懼欲の六情の發するも、亦皆一誠の發動流行に非るもの無御座候。是れ孔丘の、吾が道一以て之を貫くと申す所のものに御座候。左候へども、孔丘の言行、至誠一貫ならざるもの有之候は、未だ三才の大經大法を全識眞知せざるの過と奉存候。其の事の詳かなること、別に筆記仕候者御座候へども、是れ亦一旦斯に相盡し難く奉存候。右の次第に御座候て、一誠の道は、三才を總括し、萬物を綱紀し、至大至高の大道に御座候て、乍恐神皇大に之を明かにしたまひ、之を行ひたまへるを以て、仁を言はせられずして、仁大に存し、義を語らせられずして、義大に明か、至教不言に行はれ、彝倫無爲に敘し、猶、日地言はずして、四時行はれ、百物生れるが如く、實に天日と其の御大徳を同じくせさせられ、大地と其の御厚徳を等しくせさせられ、光輝宇宙を照し、德澤萬世に周く、寶祚の隆、眞に日地と共に窮あらせられず、盛徳大業實に至れり



盡せりと申し奉るべし。然れども尙其の文物名稱等に至り候ては、人の餘あるものを取りて、我が未だ足らざるものを足させられ、彼の已に具はりたるものを取りて、我が未だ缺くる所のものを補はせられ候儀にて、奉申上候も恐多き御事に御座候へども、應神天皇の儒教の善良なる者を取りて之を用ひたまへるものは、即ち是れ善を盡し美を盡したまへる所以の御事と奉存候。漢土にて、聖人は天地と其の徳を同じくし、日月と其の明を同じくすると申し、又善を盡し美を盡すと申し候は、空言誇大のことに御座候て、其の實、天地と徳を同じくせず、日月と明を同じくせざる故に、其の家國、天地と共に長久なるは無之、堯舜の禪讓も、日地の大道に悖反致し、君臣父子の正道を敗亂するものにして、決して善美を盡せりとは申難きことにて御座候。

一、道は三才の公道に御座候て、一國一家の私有に無御座、是の故に乍恐神

皇にあらせられ候ても、斯の道を以て、御私物とは遊ばされ難き御事と奉存候。右故に、儒佛老莊諸子百家西洋諸學、其他何れの學に御座候とも、凡そ斯の天地間に存在仕り候者は、悉く三才道中の品物に御座候て、大眼目を用ひて之を觀察仕候時は、即ち亦皆神皇御大道中の一物にて御座候へば、異邦の學、異邦の事に御座候とも、概して之を排擯せらるべき御事には有之まじく、又儒學老莊諸子百家の流、及び佛學洋學の徒も、亦皆神皇の御遺民にして、乍恐朝廷の御赤子に非るは無御座候へば、是れ亦元より概して疾惡せらるべき御事には有御座まじく、唯其の三才の大經大法に反し、神皇至誠の御大道に戻り、人道の正義に背き、鳥獸魚木の道を攪雜し、邪横惡逆、虚偽誕妄、正道を傷害する者に至りては、嚴に之を排斥し、務めて之を拒絶せらるべきこと、是れ亦即ち三才の大經に御座候て、神皇の御大法に御座候儀と奉存候。是を以て、其の取捨進斥



の際、尤も謹嚴にして、一點の私意を加ふべき事には無御座、偏見固執、門戸を建つるは小人の學、藝者の業に御座候て、固より大人君子の事に無御座と奉存候。是の故に、草根木皮骨角土石の類、之を用ひて病を療する者は、醫師の良に有之、菜根木實鳥獸魚介の肉、之を用ひて食を製するものは、宰夫の能に御座候。農工商賈及び凡百の技藝、之を用ひて用に給するものは、上位の人に有之、儒佛老莊諸子百家西洋諸學、其の善良なる者を擇んで之を用ひさせられ、以て邦國を平かにし、萬民を安んぜられ候は、乍恐神皇の御大道に御座候て、皇學の御要道に御座候儀と奉存候。謹んで惟みるに、神皇の御大道は彝倫に御座候て、其の御教學は彝倫を明かにせさせらるる所以に有之候。彼の漢土堯舜の道も、亦彝倫を明かにせんと欲して未だ盡す能はざる者にて御座候。右故に、其の禮儀三百威儀三千は、是れ皆彝倫を明かにする所以に御座候て、其の五

刑の屬三千は、是れ皆彝倫を敗亂するものを罰するゆゑんに御座候。其の他の禮樂制度、禁令賞罰、兵制軍律も、亦皆彝倫を明かにする所以に非るは無之、農工商賈の業より、凡百の技藝器物に至る迄、亦悉く彝倫を保有する所以に非るは無御座候。西洋諸學も亦皆彝倫を保有する所以に有之、佛教等の如き、其の教師の、其の身に彝倫を廢する者と雖も、其の要する所は、天下の人をして彝倫を保全せしめんと欲する老婆心より出て候者に御座候て、天下の人をして彝倫を斷絶せしめんと欲するものにては無御座候。左候へども、大に其の大本を過り候儀に付、其の弊害も亦淺少ならざる儀に御座候。是の故に彝倫を保有するの用に給せざる者は、天下無用の物に御座候て、彝倫を傷害致し候ものは、是れ悉く邪惡不正の物に御座候。故を以て、其の無用なるものを排斥せられ、其の邪惡不正なる物を拒絶せられ、大に世界の衆智を集めさせられ、



大に世界の衆善を取らせられ、大に世界第一の學校を御興建あらせられ、大に皇道を天下に明かにせさせられ、大に皇法を天下に詳かにせさせられ、大に皇學を天下に講修せしめさせられ、其餘光四夷八蠻に被ひ、世界萬國をして、悉く皇道皇法皇學を尊戴敬奉せしめ、宇内をして、大に至治の德澤を蒙らしめたまはば、天日も爲に光輝を増し、大地も爲に厚德を益し申すべき儀と奉存候。斯に至りて、乍恐御大仁御大孝の御大成あらせられ候御事と、重々乍恐、誠に至願の至に堪へず奉存上候。

一、道はもと名これ無く、教學も亦其名あること無御座、其の名を命じ候は中世以降の事に御座候て、其の本は異端の流と其の道其の學を別くる所以に御座候て、已むことを得ざるより起り候儀に御座候て、皇國に、神道、古道、國學、和學、本學(二)杯と唱へ、又外國より來り候を、儒學、佛學と申し、又神儒佛を集合して、之を心學と申し、近世、西洋の學を洋學と唱へ、儒佛の

内にも種々の流派も有之、洋學の中にも、蘭佛、英、亞、魯、逸等(一)の別も有之、又之を細分仕候ときは、多端の學者も御座候て、各其の長ずる所有之、又其の短なる所有之、正なる所有之、邪なる所有之、眞なる所有之、妄なる所有之、公なる所有之、私なる所有之候て、其の長短正邪眞妄公私、多少一ならず候へども、之を要するに、其の道其の學の至誠一貫なるものに至りては、斷々乎として一も無之儀にて御座候。是れ其の道の大本、其の教學の根元を立て候もの、未だ三才の大經大法を全識眞知仕らず候て、大に其の本根を過り候より發し候弊害と奉存候。然るに天下の人各其の習ふ所を是とし、其の好む所に淫溺し、人々其の學を學とし、其の心を心とし、其の方向を異にし、其の道とする所、其の趣を同じくせず。是を以て、其の衆論紛々擾々として統一ならず。是れ大に天下の紛擾を致し、乍恐皇威の未だ大に振はず、皇化の未だ大に固からざる所以のもの、職



として是に由り候儀と奉存候。乍恐上世神皇の御大道、御大法、御教學の御事は、眞に三才の大經大法を全識眞知せさせられ、其の太學の御事は、即ち仰いで天日に則らせられ、俯して大地に法らせられ、近く之を御身に求めさせられ、遠く之を萬物に取らせられ、又群臣に問はせられ、尙疑はしき御事は、太古の神術を以て、之を天日に問はせられ候御事にて、一點の御私意を加へさせられず、至誠至直至善至中、正大公明の大道を以て、立極垂統あらせられ候御事に、御座候て、眞に日地と其の御大徳を同じくせさせられ候御事にて、素より世界萬國の諸道諸學の決して企て及ぶ所の事に無御座候。依之、奉申上候も、恐多き儀には御座候へども、上世神皇の御立定あらせられ候大道太學を以て、皇道の御太元、皇學の御大本を、御嚴立御確定あらせられ、尙、應神天皇の、儒教を取りて之を用ひたまへる御盛意に本づかせられ、前段陳述仕候諸教諸學の善良

純正なる所の者を擇んで之を取らせられ、皇道皇法の輔翼とせさせられ、集めて之を大成せさせられ、大に其の御名稱を正され、之を皇學と稱せられ候て、他の諸道諸學と大に異なる所以の名實を、天下に明かにせさせられたき御事と奉存候。

一、皇學は即ち乍恐神皇の太學と申し奉り候儀に御座候て、漢土にて申し候帝王の學と申し候に、似寄り候儀に御座候。是れ則ち文武を總べ、古今を貫き、世界を統括致し候、三才至大の學に御座候て、士君子大に其の職分の當然を修め、大に其の性分の本然を盡すの、實學に御座候間、博士學、藝士學とは、大に異なる儀に御座候。士君子元より其の一身に盡く之を講修致し候こと能はず候とも、其の材に隨ひ、其の分に應じ、其の要務を先にし、其の實用を主とし、其の實行を修め、其の精力の及ぶ所、之を學び、之を講ずるときは、必ずや能く皇佐の才を成し、能く相將の任に當



り、御國家常變の御大用に足り申すべき儀と奉存候。其の及ばざる者に候とも、能く其の身を修め、其の職を奉じ、善士たることを失はざるべきことと奉存候。之を眞に實用の學と申すべき儀にて御座候。依之、何卒大に皇學を御振興あらせられ、大に天下の人士を御教導あらせられたき御儀と、深く奉至願候。

一、前段申上候皇學の御事は、上世神皇の御立定あらせられ候皇道皇法を以て、其の御大本、其の御極則を御嚴立あらせられ、世界の衆智を集め、世界の衆善を取らせられ、以て其の全體を御大成せさせられ、之を皇學と稱せられ候儀は、猶天下諸藩の中、兵學兵技の類、其の祖宗傳來の學流に本づき、廣く天下諸流の善所を取集めて、之を合併し、往々之を家流と唱へ候儀と、甚だ相似たることに御座候。且つ其の諸流の善所を取り、之を我が物と致し候儀に付、其の取集め候所の事を以て、之を一々に何流

何流と、別に名目を立てざる儀に御座候。尤も識見の有之事と相聞え候。是の故に、宇内萬國の教學の如きも、其の取りて之を用ひたまへる所の物は、即ち亦皆我が皇國の御物に御座候間、別に漢學、佛學、蘭學、英學、佛蘭西學、獨逸學、杯と、學名を立てさせられ候儀は、御失體の儀と奉存候間、悉皆皇學の名目を蒙らせ、皇學中の品物と成させられたき御事と奉存候。其の書籍をば、漢籍、洋籍、蘭書、英書、佛籍、亞籍、魯籍、杯と呼び候て、餘儀なきことに御座候へども、學名は決して唱へさせられず、只、漢籍を讀む、洋籍を見る、蘭書を用ふ、英書に見ゆる、魯籍に之ある杯と唱へさせられ候て、教學の名目は必ず皇學皇教の御名稱に歸し候様にあらせられたき御事と奉存候。左候て、學校に於て、其の學科を分けさせられ、經學、史學、制度學、律令學、天文學、地理學、理學、化學、語學、筆學、書札學、文章學、博物學、器械學、數學、醫學、音律學、測量學、歌學、詩學、農桑學、水利學、食貨學、通商學、



諸子學の類、兵學には將帥學、練兵學、築城學、海軍學、航海術、水練、砲術、馬術、劍術、槍術、體術、其の他文武有用の藝技、及び金工、木工、石工、皮工、角工、土工の類、其の學藝の名目を立てさせられたき儀と奉存候。左候て、彼の神道、國學、儒學、佛學、蘭學、英學の類、元より一國一家の私學に御座候て、決して三才の太學にては無御座候間、孰れの學科、孰れの藝品に御座候ても、必ず皇國中古の傳來に執拗せず、漢土の學流に偏倚せず、西洋の學藝に拘泥せず、廣く世界萬國の學藝に通達致し候ときは、其の心に偏倚執拗の弊を免れ、善く其の善所要所を識得し、擇んで之を取ることを得申すべく、然るときは、自ら三才の大經大法を眞識し、一學一藝の上に於ても、必ず皇國適當の學流を發明し、大に皇學の羽翼となり、皇法の補助となり、皇學の全體を大成することを得申すべき儀と奉存候。夫れ天日に私照なく、大地に私載なく、神皇に一點の御私意あらせられず、日地の心

を以て御心とせさせられ候御事に御座候間、天下の人々、何卒大に神皇の御心を以て其の心といたし、偏黨なく、執拗なく、正大公明至眞至平の心を大に存養し、大に三才の大經大法を眞識し、大に皇道を明かにし、大に皇法を詳かにし、大に皇學を講習し、大に御國光を世界に輝かし、眞に宇内の宗國、萬國の極尊にまします所以の御實體を、大に天地の間に彰明較著ならせたまはんことを、心誠に懇禱至願仕り、日夜念頭脊々仕候様有之度儀と、重々深厚に至願仕候儀に御座候。

一、大學校御造建の御次第は、先づ會議所を開かせられ、大に天下の諸學有名の士を召集められ、其の上に學士藝士に無之候て、文武大道の眞理に達し、時勢に明かに、時務に通じ、其の藝も亦士たるの嗜有之候、名士良士の風有之候者を召出だされ、之を上座とせられ、學士藝士を次座とせられ、尙其上に、兼て申上も仕候、威權も御座候、要路の御人、兩三人を擇ばせ



られ、其の會長を命ぜられたき御事と奉存候。

一、右名士學士召集められ候御手續は、朝廷の諸官、府縣及び諸藩公務人へ、左の趣にも被仰出候はば、天下有名之士、凡そ残る所なく相知れ申すべきかと奉存候。

一、神道、國學の類、漢學、佛學、洋學の類、兵學、兵技、天文、地理、醫術、算術、器械學の類、其の學に長じ、其の藝に達し候て、人物惡しからざる有名之士庶、天下二三等より下るまじきと聞え候者、其の府藩縣中住居の者は申すに及ばず、廣く諸國の聞見に及び候所の人名、相記し可申出事。

一、右學藝を專に致し候者に無之候て、廣く文武の道理に達し、時勢に明かに、時務に通じ、其の藝も亦嗜有之、言行正しく、名士良士の風有之候者、同様可申出事。

一、右人物、姓名住所及び其の長ずる所の學藝の品名、並に其の身分人品

の大略を記し可申、相知れ兼ね候分は、姓名と其の學藝の品目のみにて宜しく候事。

右之趣、來る幾日迄に、無遅々可申出候事。

右の趣にも被仰出に相成候はば、凡そ天下有實有名之士庶、其の姓名御聽に達し申すべく、右の中にて、多人數より其の姓名を申立候者は、孰れにも其の中の秀に可有御座、尙其の實を、御手の届かせられ候程は、御穿鑿御座候て、多勢の中より、佛學、醫學、算學等、差向御要用に無之分は、先づ除かせられ、御要用の學藝のみ、一學一藝に兩三人づつ、第一等と相聞え候者を召出だされ、二三十人程も御集めあらせられ度奉存候。是れ其の類より御拔萃あらせられ候、天下の秀英に御座候。此の秀英を會せられ、大に學術を討論研究せしめられ、取捨折衷せさせられ候て、衆論大に一定せしめられ、以て皇學の御大本を御嚴立御確定あらせられ、又其



の人々をして其の材學に應じ、學校の諸官教授を命ぜられ候て、大に學校を御興張あらせられ候はば、天下決して之を動かし候事は相成るまじく、世界の力も亦之を動かし候ことは決して相成り難き儀と奉存候。一、學術討論研究取捨折衷して、之を一定せしめられ候次第は、前段秀英の士を會させられ、先づ第一に、三才の本體、天地人なるか、日地人なるかを尋ねさせられ、次に三才の大經大法は如何なる者なるかを尋ねさせられ、次に乍、恐皇統の御太元、皇道の御本體、皇法の御實體如何を尋ねさせられ、大公至平の心を以て、皇國天下萬世の爲、謹んで大に之を討論研究し、確く之を論定仕候様、被仰出度御儀と奉存候。重々乍、恐右條々、確然論定仕候儀、元より爲し難きことには、無御座と奉存候。右の一段論定成就仕候ときは、斯に於て、三才の本體、三才の大經、神皇の御大道、乍、恐皇統の御太元、萬物萬道の大本、始めて大に世に明かに相成候儀に御座候

て、皇道皇法の御大本、斯に相立候儀と奉存候。實に三才の大經、神皇の御大道は、素より純粹至善、至中至正、至直至順、至眞至實、至誠一貫の大道に御座候間、之を以て規矩準繩とし、權量尺度とし、以て天下の學術、世界萬國の道教を觀察格正仕候ときは、離婁公輸子が方圓に於けるが如く、師曠が五音を正すが如く、權量尺度の輕重大小長短を計るが如く、其の眞妄虛實、是非善惡、曲直正邪公私の分、決して其の目睛を遁るること能はず、悉く其の本體實形を辨識仕り、取捨進斥の際、一點の失誤有之まじくと奉存候。依之、右御大本已に御立定御座候上は、其の他の萬道萬事破竹の如く、圓石を轉ずる如く、眞に斷判裁制、隨て埒明き申すべき儀と奉存候。然る處、固陋寡聞頑鈍の人々に御座候ては、其の舊習に拘泥し、其の偏見に執拗し、容易に説論相成兼候へども、廣く天下の秀英を會させられ、之を討論研究被仰付候ときは、深く御力を勞せられずして、衆論



一定仕るべき儀と奉存候。殊に天朝漢上西洋の書籍に博涉仕候明敏の者に御座候はば、多言を費さずして、速に三才の本體、三才の大經に通達し、皇道皇法皇學の全體をも、眞誠仕るべき儀と奉存候。就ては、會長を被仰付候御人々には、右召集められ候所の天下の秀英に先立ちて、之を熟議研究せられ、其の根本を御確定なし置かれ候儀、是れ亦御先務中の御急務と奉存候。左候へども、速かなるを欲したまはず、小成に安んじたまはず、學校御取建の儀、假令時日相延候とも、無御餘儀御次第に可有御座候間、何卒悉く御念入れさせられたき御儀かと奉存上候。

一、右學術衆論一定仕候上にて、學制學則、及び學校の大小御作造の次第迄、衆議せしめられ、是れ亦一定仕候上にて、彌學校御取建御手始あらせられたき御事と奉存候。

一、御教學の儀は、至重の御政典に御座候間、諸官と同じく、皇學官と稱へさ

せられ、神祇官の次に列せられたき御事かと奉存候。神祇御祭祀に次ぎ候て、皇學御講修、御臣民御教育の儀は、御大切至極の御事に付、知官事、副知官事の職を置かせられ、皇學の庶政を總裁せさせられ、判官事、權判官事を置かせられ、官中の庶務を糾判せしめさせられたき御事と奉存候。學政學則の儀は、必ず之を學士、藝士に任せられ難き儀と奉存候。學士、藝士なる者は、各其の藝とし、其の學とする所に偏私の有之ものに御座候て、其の上に、天下の藝士、學士の徒は、免角浮浪農商の類より身を出し候遊民に近き者多き儀に御座候間、上君子の大道を眞誠仕候者至て鮮き儀に御座候。是の故に、學政學則の儀、之を藝士、學士に任せられ候ときは、必ず大なる弊害を生じ、學校無用の長物と相成候のみに無御座、更に御邦家の御患害と罷成候儀に御座候間、必ず之を藝士、學上に任せられず、厚く名士、良士を御選擇あらせられ、學校諸官に命ぜられたき



御事と奉存候。其の教授助教の如きは、其の學藝に長じ候藝士、學士を御選用御座候儀は勿論に御座候へども、可成丈其の人を擇ばれたき御事と奉存候。

一、皇學官の中、先づ太學院を立てさせられ、經學、史學を講修せしめられたる、經史は即ち文武を總べ、古今に涉り、三才を統貫仕候て、表裏體用、元より一體のものに御座候間、此の院にて之を講修せしめられたき御事と奉存候。古事記、書紀、令式の古典は、即ち史にして經に有之、萬葉集は、歌にして是れ亦經となり候儀に御座候。漢土にても、尚書、春秋の如き、史にして經に有之、毛詩の如き詩にして經となり候儀と同じき事に御座候。其の他、只今迄經の名なき書も、經に入るべきものは、此の院にて習學せしめられたき儀と奉存候。其の餘の學藝は、各其の學寮を立てられ候て、一學一藝づつ學習せしめられたる、尤も其の品に依りて、兩三藝

を合せ學ばしめられ候儀も、可有之奉存候。練兵の儀は、生兵の教練迄を、學校にて被仰付、兵隊訓練等の儀に至り候ては、軍務官へ引渡し、同官にて訓練被仰付可然儀と奉存候。其の上、海軍に屬し候事件、及び京地にて御不都合の儀は、攝海邊便宜の地に於て、學場を設けられ、習學被仰付度儀と奉存候。然る處、孰れにも、經史は勿論、一學一藝毎に、必ず世界萬國の學藝を兼學せしめさせられ候儀、是れ其の要道に御座候儀と奉存候。尤も一人にて兼習相成難き品は、兩三人づつ合せ習はせられたき儀と奉存候。左候ときは、終に一人にて兼習仕候同様の御用に相立ち申すべき儀と奉存候。

一、太學院の學頭は、必ず文武を兼ね候て、人の師表となるべき者を選んて置かせられ、教授、助教も、右に準じ、重く其の人を擇ばせられ、學頭、教授、助教を置かせられたる、學徒の儀は、公卿以下、諸藩士、庶人に至る迄、凡そ其



の數を定められ、他日御國家常變の御用に供せらるべき御入用だけの人員は、入學被仰付、又其の習學仕候所の學科をも定められ、上中下の等級をも立てさせられたき儀と奉存候。尤も右入學被仰付候人員の外、在京の朝臣には、悉く可成丈入學修業仕候様被仰出、其の他諸國の府縣諸藩士、庶人に至る迄、出願次第入學御許容被成下度と奉存候。

一、何れの學、何れの藝を習學仕候者も、經學は必ず講修仕候様被仰付度儀と奉存候。是れ皇學の大本、人道の先務に御座候儀に付、經學を仕らず候ては、人の人たる道を辨知せざる儀に御座候間、人々必ず經學を仕らず候ては、決して相濟まざる儀と奉存候。然る處、其の人に依り、其の材に隨ひ、又其の分に應じ、經學に深く力を用ひ居り兼ね候人々も御座あるべく候へども、右にても、素讀の儀は、元より太學院にて習學し、其の上、太學院定日の講義は、必ず罷出聽聞仕候様被仰付度と奉存候。其の他

の諸學諸藝は、其の人の分に應じ、其の材に隨ひ、急務を先にし、實用を勤め、其の精力の及ぶ所、之を學び、之を修め候様、厚く御教導被成下度、左候ときは、各、其の材を成し候て、必ず御國家常變の御大用に供給するに足り申すべき儀と奉存候。是れ則ち、士君子其の職分の當然を修め、其の性分の本然を盡し、大に人の人たる道を其の身に立て、以て各、其の忠孝を全うするの大道に御座候。重々乍恐、朝廷にも、士君子をして、其の忠孝を全からしめ、億兆をして、至治の德澤を蒙らしめたまふものは、即ち大に天日を御尊戴あらせられ、大に御大孝を述べさせられ、尙御臣民を御愛育あらせられ候御大仁を盡させられ候所の御大道に可有御座候儀かと奉存上候。

一、皇學官彌、御造建の上、粗、其の御規則も相定まり候はば、天下府藩縣の大、小に従ひ、人を擇んで、兩三人六七人づつ、悉く入學被仰付、大に皇學を講



修せしめさせられ、大凡其の學業成就仕候はば、各其の府藩縣に御返し  
あらせられ、其の府藩縣の學校教頭教授と爲さしめさせられ、府藩縣の  
子弟を教導せしめ候様、御教命を下させられ、尙異學を仕候者は、之を御  
禁止被仰付、且つ著述翻譯、其の他新に上木再版等仕候者は、必ず皇學官  
へ伺を立て候上にて、世上に出し候様、嚴重被仰出、皇學に害ある者は、之  
を御禁絶あらせられ候はば、十年を出てずして、天下文武の學術、大に御  
改正御一新の功を奏せられ、隨て天下の人心も、亦必ず大に正誠に復し、  
其の方向も亦大に一定仕るべき儀と奉存候。斯に至りて、皇學も亦益、  
其の盛大を致し、世界萬國も、亦來りて其の法則を取り申すべき儀と奉  
存候。是れ乍恐、大に宇内を御統御あらせられ、大に宇内萬國の大君大  
師と成らせられ候所以の御大基本に御座候儀と奉存上候。尙乍恐、深  
厚御賢慮被成下度、謹んで深く奉至願候。

右奉申上候儀は、誠に學校御造建の大意に御座候て、其の節目に至り候  
ては、一旦紙筆に申上盡し難く奉存候。且つ其の時機の御模様依り、  
御用度の多寡に應じ、其他御差支の有無に従ひ、學校の大小、學藝の多少  
等の儀は、如何様にも御損益御取捨あらせらるべき御事と奉存候へど  
も、其の要道實務を廢せられ候ときは、實以て學校無用の長物と相成候  
のみに無御座、眞に容易ならざる御後患を生じ候儀に御座候間、何卒學  
校の御造建御延引あらせられ、其の御小益を得させられ候よりは、其の  
御大害を招かせられず候方、萬々御爲宜しき御事かと奉存候儀に御座  
候。右の趣き、厚き御沙汰を蒙り奉り、難有仕合に奉存、謹んで此段奉申  
上候。重々不願身分、不奉憚不敬、眞情奉申上候段、誠に奉恐入候へども、  
何卒出格の御垂憐を蒙り奉り候はば、重疊難有仕合奉存候。誠恐誠惶  
頓首謹言。



八月五日

長谷川深美

- (一) 明治元年八月、輔相岩倉具視に提出したるもの。長谷川昭道全集には「學政建言其一」と題す。
- (二) 子思。
- (三) 孔子。
- (四) 周の文王、武王。
- (五) 道教と佛教。
- (六) 詩經に「有<sub>レ</sub>物有<sub>レ</sub>則」といふ句あり。孟子の告子上篇にも之を引用したり。
- (七) 皇道述義。
- (八) 漢の董仲舒の言に「道の本源天より出づ」とあり、支那思想は殆ど皆此の外に出でず。
- (九) 皇道述義。
- (一〇) 論語里仁篇に出づ。
- (一一) 九經談總論評説。
- (一二) 中庸に出づ。
- (一三) 孝經に出づ。

- (一四) 幕末に大國隆正の唱へたるもの。
- (一五) アメリカ。
- (一六) ロシヤ。
- (一七) ドイツ。
- (一八) 孟子離婁上篇に「離婁の明、公輸子の巧」といふことあり。
- (一九) 孟子離婁上篇に「師曠の聰」といふことあり。
- (二〇) 書經。
- (二一) 詩經。
- (二二) 各個の兵士。
- (二三) 京都。



406  
117

昭和十五年十一月十日印刷  
昭和十五年十一月十日發行

定價 金壹圓五拾錢

編輯者

長野縣埴科郡屋代小學校內

信濃教育會埴科部會

右代表者 荒川義男

印刷者

長野市妻科四六

大日方利雄

印刷所

長野市南縣町六五七

信濃毎日新聞株式會社

發行所

長野縣埴科郡屋代小學校內

信濃教育會埴科部會



終

